



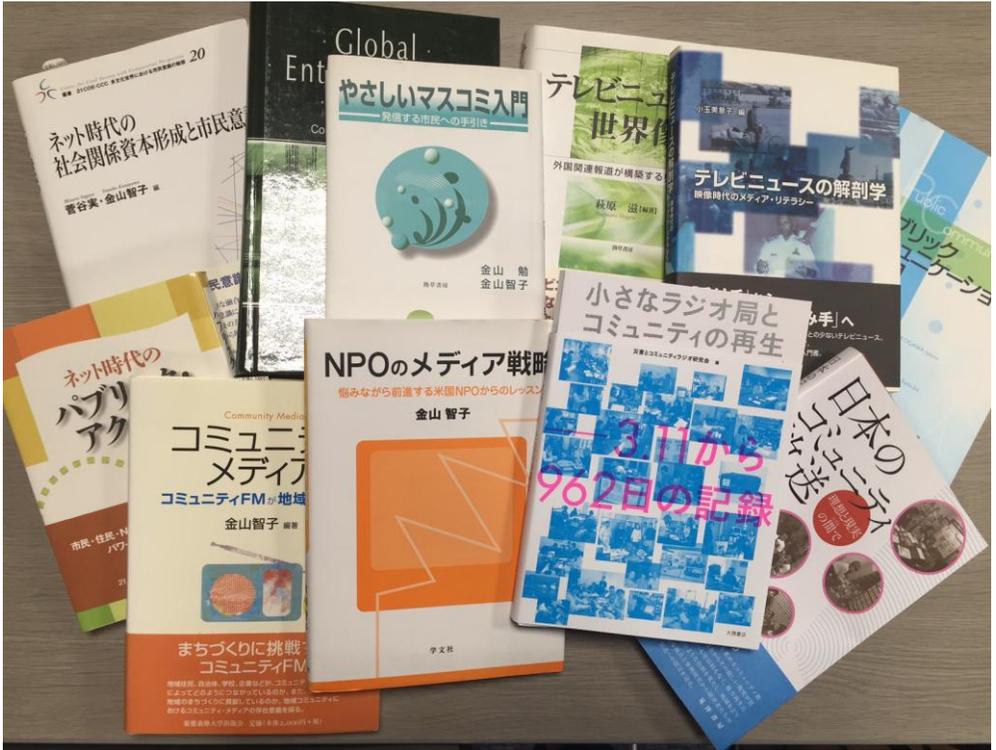
情報科学芸術大学院大学附属図書館

vol. 7

2017.7

# IAMAS 図書館便り

IAMAS [イアマス] とは、情報科学芸術大学院大学の英語表記の頭文字を取った略称です。



金山智子著書

## 特集 メディア・コミュニケーション 金山智子

→ 自著を語る / 人生を変えた一冊 / 学生に薦める一冊

- 館長コラム
- 図書館を活用する
- お知らせ



この特集では、IAMASの教員に、自著・人生を変えた本・お薦めの本などを紹介してもらいます。第7回は、産業文化研究センター（RCIC）長の金山智子教授です。

## →自著を語る

### 金山智子編著『コミュニティ・メディア～コミュニティFMが地域をつなぐ』

コミュニティのメディアと問われて、どのようなメディアを思い浮かべるだろうか。CATV、コミュニティFM、地元紙、タウンペーパー、地域ポータル、町の広報紙や閲覧板などがあげられるが、本書はコミュニティ・メディアを概観した書籍の中で、コミュニティラジオに特化した初の著作である。2000年初、地域メディア研究者や自治体関係者からなる地域メディア研究会の仲間で全国40のコミュニティFM局調査を行い、コミュニティFMがどのように地域をつなぐ役割を担うかまとめたものである。本書出版以降、後続の研究も増え、地域活性化、防災、文化、公共性、ジャーナリズムなど多様な広がりを見せており、日本のコミュニティFM研究の基礎的参照文献となった。15年を経てコミュニティFM局は160から300へと大幅に増加。背景には自然災害後に立ち上げられた臨時災害局設置がある。ネット時代の小さなメディアの研究は重要性を増すばかりである。



慶應義塾大学出版会  
 /2007年

## →人生を変えた一冊

### NEKO-PICASSO『大学猫のキャンパスライフ』

筆者は猫が好きである。物心ついた時から今までずっと猫と暮らしている。米国留学では猫2匹と共に渡米し、留学先の捨て猫を加え3匹と帰国。そんな筆者には敬愛する猫師匠がいる。10年前、前任校のキャンパスで、多くの猫と共に福祉社会学の研究を深める教授に出会った。小畑和教授、私の猫師匠である。師匠は、毎朝、浅草のホームレスに朝食を配ってから大学キャンパスに出講。猫缶やドライフードを積んだカートを引く師匠を見つけた猫たちが、キャンパスのあちこちから現れる。猫と大学の共生を実感出来るこの光景が好きだった。病気の子や秘蔵っ子は研究室にかくまわれていた。北海道から単身赴任の師匠は、猫たちの世話が欠かせないからと自宅に全く帰らなかった。定年間近になると、度々自宅に帰るようになったと思ったら、キャンパス猫たちは一匹残らず北海道の先生の自宅に移住させられていた。これが福祉社会学者小畑教授の責任の取り方だった。猫も師匠もいなくなりキャンパスは寂しくなったが、そんな時に読んだのがこの本だ。

東京都内17の大学に住む猫たちのキャンパスライフを、猫好きの学生たちが丁寧に取材し、写真やイラストを入れて仕上げた猫好きにはたまらない本だ。そこに描かれた小畑教授と教授が世話する猫たちの生活は、動物との共生を実践するもので励まされる。IAMASは猫好きの教員が多く、猫談義や保護活動ができる環境があり、猫と社会、情報芸術を束ねた研究実践を通じて、私も猫師匠の意識に少しでも近づいてゆきたい。



雷鳥社/2008年

## →学生に薦める一冊

### Everett M. Rogers 『Diffusion of Innovation』

世界で15ヶ国語に翻訳されている本書は、日本でも『イノベーション普及学』や『イノベーションの普及』など複数の翻訳書が出版されている。普及理論は、元々は農業技術の普及に関する膨大な調査をメタ分析して構築した理論だが、特にコミュニケーション技術を中心にした新しい諸技術やアイデアが社会システムのメンバー間に時間をかけ、特定のチャネルを介して伝達されるプロセスであることを一つの体系として説明する。S字曲線、アーリーアダプターやレイトマジョリティなど、マーケティング書籍で目にするような言葉はここで生まれたものだ。

普及理論はコミュニケーション理論と位置付けられるが、実際には、マーケティング、地域開発、公衆衛生、農村社会学、技術革新など、適用分野は多岐に渡る。1962年の出版以降、時代の変化と共に改訂されてきたが、近年の技術革新による大変革社会における研究や実践でも適用されている。

私は大学院時代に普及学を学んだが、幸いなことに著者のロジャーズ教授（故人）から直接教を請う機会にも恵まれた。最後にお会いした2001年の国際コミュニケーション学会で、「これまでにインターネットほど速い普及はない」と語られていたことが記憶に新しい。その数年後、Fifth Editionにインターネットが加えられた。本書はイノベーションの創造を目指すものとして是非とも読了しておきたい一冊である。



画像は第5版/2003年

## 館長コラム その7 読書の楽しみ (前田真二郎・IAMAS 教授)

読書の楽しみとは何か？ 様々な知識を享受し知的欲求を満たすことだろうか。それとも、物語世界に浸りその語り方の妙を味わうことだろうか。大学生の頃、自分の専門領域に関係する映画批評や評論だけを集中して読み込んだ時期があった。中学、高校時代に純文学を読み耽ったこととは異なる大きな体験として記憶に刻まれている。それは緊張感をともなうスリリングなもので、今から振り返れば、あれこそが真なる読書の楽しさだったようにも思える。

その頃は、映画鑑賞に明け暮れていたのだが、中でもヌーヴェルヴァーグ・シネマと呼ばれる古いフランス映画を重点的に観ていた。1960年代の公開当時、それらに対してどのような評論があったのか知りたくなり、そのとき手にしたのが、映像作家・松本俊夫による1967年に出版された評論集『表現の世界』だった。そこには、ジャン＝リュック・ゴダール監督の1965年制作の劇映画『気狂いピエロ』についての5、6ページの評論が収められていた。ヌーヴェルヴァーグ・シネマの傑作と呼ばれるこの映画を私も重要作として注目し、映画館でのリバイバル上映を鑑賞後、レンタルショップで借りたビデオを何度も観ていた。評論では、以前のゴダール作品との比較分析に始まり、技術的な観点から鋭く考察が行われていた。何よりも、作品に散りばめられた引用や暗喩を読み解いていく明晰さに衝撃を受けた。「このようなレベルで映画の内容を理解できていなかった」「今の自分にはこの評論は書けない」。このような実感が読みすすめるとともに沸き上がってきた。自らに備わっていない教養を意識することで世界の大きさを知るといふ尊い体験だった。

松本俊夫先生は、今年4月12日、85歳で逝去されました。大学院では2年間に渡ってご指導いただき、その後も大変お世話になりました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

# 図書館を活用する その1 “所蔵なし”でもあきらめない

理想の図書館は、必要とする本や雑誌がすべて揃っていることだろう。論文の引用文献として挙げられている本を確認したいときや、研究テーマに関する先行事例を調べるときに、パベルの図書館のごとく、それらの資料が図書館ですべて揃うのなら、研究もすこぶるはかどるものだ。

しかし、現実はそのようではない。どこの図書館も限られたスペースや予算、選書の方針などによって、限られた本や雑誌しか所蔵することはできないのだ。その結果、オンラインの蔵書検索（これを図書館用語で「OPAC」という）でタイトルや著者名などから検索しても、ヒット件数がゼロとなることがたびたび発生することになる（検索の方法がまずいことはここでは問わない）。

最近の図書館は、大学図書館のほか、県立や市町村立の公共図書館でもインターネット上で蔵書検索ができる。さらには、複数の図書館の所蔵を検索できる横断検索という仕組みを都道府県立図書館や国立国会図書館、NII（国立情報学研究所）、カーリル（本社：中津川市）などが提供している。それらの検索ツールを使えば、図書館職員だけでなく、図書館の利用者でも、国内のどこの図書館に探している本や雑誌があるかがすぐさま分かるようになっていく。

どこの図書館に求める資料があるかがわかれば、あとは所蔵している図書館に直接赴き閲覧・複写をするか、遠隔地にある・時間がないなどの理由で行けないのなら、図書館経由で借りる・複写を依頼することが可能である（これを図書館用語で「ILL（=Interlibrary Loan）」という）。

蔵書検索で所蔵なしと表示されても、あきらめないで、ぜひ図書館職員に尋ねてみてほしい。所蔵している図書館を見つけ出し、可能な限り、資料を提供しよう（ただし、複写料金や郵送料のご負担はお願いします）。

## お知らせ

### →資料展示 2017.6～7

資料展示として、「教養としてのフランス現代思想」をテーマに、文学や映画などの芸術批評に大きな影響を与えたフランス現代思想を代表する思想家とその著作を紹介しています。また、図書館入口の展示スペースでは、オープンハウスにあわせてIAMASの刊行物を展示しています。



IAMAS 刊行物の展示

### →蔵書検索のデザイン一新

7月末から蔵書検索のデザインが一新しました。検索結果の表示も見やすくなりましたので、これからもさらに蔵書検索をご利用ください。

### →今年度も開催「今週の一冊」＆「大人のためのブックトーク」

昨年度に引き続き、IAMAS図書館・アーカイブ・プロジェクトの一環として小林昌廣先生による「今週の一冊」を毎週木曜日、18時30分から開催しています。今年度も、アリストテレスの『魂について』や世阿弥の『風姿花伝』といった古典作品から、島尾敏雄の『死の棘』や池田晶子の『14歳からの哲学』などの現代の話題作まで、幅広いジャンルから毎週一冊の本が紹介されました。

また、岐阜県図書館において「今週の一冊」を拡大して3冊の本を紹介する「大人のためのブックトーク」を奇数月（年6回）に開催しますので、ぜひご参加ください。

